推理小説代表作選集

The mystery annual of Japan 1989

1989年版 日本推理作家協会編

nual of Japan 1989

江苏工业学院图书馆
藏书章

1989=推理小説年鑑 推理小説代表作選集

日本推理作家協会編　講談社

1989年版　推理小説年鑑
推理小説代表作選集
定価1750円(本体1699円)

1989年5月29日　第1刷発行

編　者　日本推理作家協会
発行者　加藤勝久
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21
郵便番号　112
電話　東京(945)1111
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂

© 日本推理作家協会 1989 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にておとりかえいたします。なお，この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-114531-2　(文2)

1989年版　推理小説年鑑

推理小説代表作選集〈目次〉

序……中島河太郎 5
見えない復讐……三好　徹 9
死者たちの完全アリバイ……大谷羊太郎 25
三分のドラマ……夏樹静子 53
しかし、ふたたび……佐野　洋 77
妻の女友達……小池真理子 97
十年……小杉健治 123
異人館の花嫁……多島斗志之 149

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しあわせのわけまえ・・・・・・・浅川　純　187
くせ・・・・・・・・・・・・・中津文彦　211
二四〇号室の男・・・・・・・・原　寮　229
雨女・・・・・・・・・・・・・泡坂妻夫　257
ヘビースモーカーは早死する・・井沢元彦　277
裏返しの殺人・・・・・・・・・海渡英祐　289
蜜と毒・・・・・・・・・・・・日下圭介　309
三階の魔女・・・・・・・・・・山崎洋子　327

「正史」は知らない・・・・・・・・・井口泰子　351
盗作の裏側・・・・・・・・・・・・高橋克彦　371
推理小説・一九八八・・・・・・・・・二上洋一　392
SF界一九八八年・・・・・・・・・風見　潤　396
受賞リスト・・・・・・・・・・・・・・・・・・400

デザイン　細谷巌
写真　只野浩樹

序

日本推理作家協会理事長　中島河太郎

「推理小説代表作選集」の一九八九年版の編集が終った。

協会では毎年、七人の編集委員を委嘱しているが、一九八八年に発表された短篇は五百三十篇ほどで、数次の選考を経て十七篇を採った。

以前の選集では採録される作家が固定しがちであったが、近年は作家の数が格段にふえたのに、収録数が限られているので、メンバーの交代が激しい。本年度版も半ば以上が新しい顔触れである。

この選集は探偵作家クラブ創設時からの事業で、本年度版はその四十九冊目である。クラブ時代の選考がいい加減だったことを思うと、隔世の感があり、その厳正な結果が認められて、読者の支持が得られるようになったのである。

恒例によってミステリー界とSF界の展望を、二上洋一氏と風見潤氏にお願いした。その労に感謝したい。

なおこの選集の一九六七年版から、「ミステリー傑作選」と題して、講談社文庫に収録

し、一層の普及を計っている。その第十九巻「殺人者へのレクイエム」は一九八四年版で、四月に刊行された。また一九六六年以前の分については、六三―六六年から選んで、特別編として夏に刊行する予定であることをつけ加えておきたい。

平成元年四月十四日

1989年版推理小説年鑑

推理小説代表作選集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

見えない復讐

三好　徹

1

香田にその儲け話を教えたのは、宝石商の金石だった。金石とは、香田が月に何回か行く小さなバー「ピコ」で顔を合わせていたが、口をきいたことはなかった。互いに常連客であることを認識している、という程度だった。何かの拍子に目が合えば、また会いましたね、という感じで会釈するが、金石にはたいてい連れがいて、互いに声をかけるということはしなかった。

香田がピコに顔を出すのは、駅前から出ているバスがなくなった時刻である。自宅は、バスで十分くらいだが、歩けば三十分以上かかる。どうせタクシーに乗るなら、ちょっと一杯のんでから帰ろう、ということになるのだ。ピコはバーといっても、着飾ったホステスがいるような店ではない。

ママは、多美子という、三十代なかばの、肉感的な女だった。ほかに若いバーテンと、女子大生のアルバイトがいる。客のなかには多美子を目当てにくるものもいるらしいが、多美子が客の誰かと特に親しくなった様子はなかった。酔った勢いで、誰かが露骨に、いっしょに寝よう、などといっても、多美子は、

「ええ、ありがとう」

とにこにこしていうだけだった。

香田自身は、彼女をくどいたことはなかった。そんなことを口に出したところで、多美子が心を開くはずはなかったし、おそらく内心の軽蔑を買うだけだろう。それより、くつろいだ雰囲気でのめる場所を大事にしたかった。

ある週末の夜、香田は多美子から、

「あした、お暇ありません？」

と聞かれた。

「暇だと、何かいいことがあるのかな？」

「香田さんは、ゴルフお上手なんでしょう？」

「上手じゃないよ。ハーフで五〇を切ったり切らなかったりだが、ママがゴルフをするとは知らなかった」

「まだコースに出たのは、十回くらいで、ゴルフをするなんていえないんですけれど、おもしろくておもしろくて……」

「それはわかるよ」

「じつは、あした行くことになっているんですけれど、もし香田さんがよければ、つき合っていただけないかと……」

「そりゃ、結構なお誘いだが、どうしてぼくに？」

「金石さんをご存知でしょう？　あの方にコースを予約し

ていただいて、あした、金石さんとわたしと、わたしの友だちの三人で行くことになっていたんです。ところが、わたしの友だちが急に行けなくなってしまって」
「ぼくにピンチヒッターを、というわけか」
「すみません。でも、わたしとしては金石さんと二人だけというのは、何となく気が重くて……といって、ゴルフはしたいしで、香田さんがよくゴルフのことを話しているのを思い出して、いっしょに行っていただけないかと……」
「ぼくはいいとしても、金石さんが気を悪くするんじゃないのかね？」
「お店のお客さんのどなたかを誘うから、ともういってあるんです。金石さんも、ゴルフは一組三人ないし四人だから、二人はぐあいが悪い、とおっしゃって」
「本当にぼくでいいのかな」
「じゃ、行って下さいます？」
「喜んでお伴するよ」
と香田はいった。
翌日、香田は金石、多美子といっしょにゴルフをした。金石はもう十五年以上のキャリアがあるとかで、香田よりも上手だった。多美子も、ビギナーにしては、いいスウィングをしていた。週に二回は、練習場へ行き、レッスン・プロの教えをうけているというのである。
終ってから、金石は、
「きょうはとても楽しかった。また、ごいっしょしましょう」
といった。
そんなことがあってから、ピコで顔を合わせると、金石が一人できたときは多美子をはさんで、ゴルフ談議をするようになった。
金石が、またやろうといったのも、嘘ではなかった。
香田としては、ゴルフを多美子や金石といっしょにすること自体はいいのだが、月に二回も誘われるようになると、考えなければならぬ問題が生じてきた。
土曜日あるいは日曜日のゴルフは、どのコースも高料金をとっている。金石は、そのコースのメンバーになっているので、一万円以下ですむが、香田はビジター料金なので、四万円近くもかかる。その上に、ガソリン代や高速料金もかかる。
香田は、東証一部上場の中堅メーカーに勤めている。給料は同年代のサラリーマンに比べて少くはない方だろうが、五年前に買った郊外のマンションのローンや、高校生と中学生の子供の教育費などを考えると、それほどの余裕はない。彼が一ヵ月に使える小遣は、五、六万円だった。それも、半分は残業手当である。
ピコの勘定そのものは、その小遣でまかなえた。
ゴルフは、会社の同好会に入っており、月に一回くらいは仲間とコースに出ていたが、法人会員の枠を利用するので、何とかできたのだ。しかし、月二回で八万円もかかる

のでは、どうにもやりくりできなかった。
金石はそういう事情を察したらしい。
「こんなことをいって気を悪くされると困るけれど、うちの仕事を手伝っていただけると、コミッションをお払いできるんですがね」
はじめは、むっとしたが、香田のプライドを傷つけないように、金石は説明した。宝石を買う人を紹介してくれるか、売ってくれるかした場合、相当額のコミッションを払う。紹介してくれた場合は、売り値の一割、売った場合は二割。
一割と二割の違いについて、金石は、
「紹介していただいたお客に対しては、負けてくれといわれると、一割程度はサービスせざるをえませんからね。香田さんがじかにお売りになるときは、それがありませんから」
といった。
その話があって半月後に、香田は、金石に客を紹介して、七万五千円のコミッションを貰った。
その客は、香田のつとめている会社の取引先の役員だった。金石の説明によると、正札九十万円の品を十五万円値引きしたという。また、役員は、
「あなたのおかげで、いい物を安く買えました」
といい、ゴルフ用のウェアをお礼代りに送ってきた。
それにしても、思いがけない稼ぎだった。双方に感謝された上で、かなりの小遣銭が手に入った。しかも、税金をとられることもないのだ。
(こんな話が二月に一ぺんもあれば……)
と香田は思った。
ところが、その気になって注意していると、宝石を買いたい人は結構いるのである。
会社の若い社員で、結婚を間近にひかえた男の場合は、香田が金石の店を紹介してやり、特に二割引きで買った。金石はそれでも売価の一割を香田に支払った。くわしい内情は香田にはわからないが、貴金属の仕入れ原価は、ふつうの人が考えている以上に安いらしい。
金石の店は渋谷の雑居ビルにあった。間口一間の小さな店で、香田も行ったことがあるが、金石は昼間はたいてい外出している。金石の説明によると、宝石商の店での売上げは三分の一にもみたない額で、どの宝石商も、お得意回りのセールスで売上げをのばしているのだという。
といって、専任の外務セールスマンを使っているわけではなく、香田のようなアルバイトが多い。金石は、
「香田さんは、そういっては何ですが、大したものですよ。もしよければ、うちの店名の名刺を作ってさし上げましょうか。会社に関係なしに売るときには、その方が相手にも信用されるし、都合がいいんじゃありませんか。もし、買いたい人から店に問合わせの電話があっても、店番のものにいっておきますから、その点は心配ありません」

とすすめた。

香田もそれは考えていたことだった。宝石商に親しい友人がいる、という形で買いたい人に接している限りは、紹介料として、一割を貰えるだけだった。しかし、金石のいうように、形だけでも金石の店で働いていることにすれば、二割を貰える。また、その方が売りやすいことは確かだった。

問題は、勤めている会社との関係である。社員がそのようなアルバイトをすることは許されていない。

とはいえ、わからなければ、それまでの話である。会社を休むわけではないし、金石の店の名刺を使えば、問合わせはそちらへ行くのだ。これまでは、連絡先を聞かれると、勤めている会社を教えるわけにはいかず、あいまいにゴマ化すしかなかった。そのために、せっかく買いたがっている相手から、信用されないこともあった。そんなことを考えると、多少の不安はあるが、名刺を作ってもらう方がアルバイトのためには好都合だった。それにゴルフのためだけではなく、金石から得る副収入は欠かせないものになりつつあった。

2

ピコに立ち寄る回数もふえていた。金まわりがよくなったせいもあろうが、多美子の香田に対する態度が以前に比べると、はるかに親密になってきたのだ。

ゴルフを何度かいっしょにしたことで、ほかの客とは違った話題もあったし、相手の気心もわかるようになった。ゴルフは、ふだん人に秘匿している性格や気質がひとりでに出てくるのだ。うわべは悠長に見える人が思いのほかにせっかちだったり、一見短気に見える人が意外に慎重なところがあったり、プレーをしているうちにわかるのだ。

金石は、大様なタイプに見えたが、ゴルフを通してみると、細かいことにもうるさい男だった。それに、かなりの吝だった。プレー中に途中のレストハウスで、キャディに数百円の品物を買ってやるのが、多くのコースで行われている習慣だが、その伝票にサインするのは、香田か多美子だった。

口には出さないが、多美子も同じように感じているらしかった。前の組がつかえて、レストハウスで順番を待つとき、コーヒーやジュースを飲んだりするのだが、そのサインも金石がしたことはなかった。

香田は、その程度の出費にはこだわらなかった。金石も儲けているのだろうが、香田も相当な副収入を得ているのである。それを思えば、キャディへの心付けやコーヒー代くらいは安いものだった。また、細かいことにうるさいにしても、その反面、香田の歩合いをゴマ化すことはせずに、百円単位まできっちり支払った。

多美子がそのことを知っているのかどうか、香田にはわ

からない。おそらく知っているのだろうが、口に出したことはなかった。

ある土曜日、香田はゴルフ場から多美子を自宅まで車で送ることになった。ゴルフ場へは、三人はいつも自分の車できていた。

フロントで各人の清算をしているとき、多美子はタクシーを呼んでほしい、と頼んでいた。

「車は？」

と香田が聞くと、出がけに故障しているのがわかって、この日はタクシーでゴルフ場へきたというのである。

「ぼくのボロ車でよければ送りますよ」

「すみません。じゃ、乗せていただきます」

と多美子はいった。

香田は、多美子をマンションの前で下ろした。駅に近いピコをはさんで、香田の家とは反対側だった。多美子はゴルフバッグを下ろしてから、

「コーヒーをいれますから、ちょっとお寄りになりません？」

と誘った。

「いいんですか」

「独り暮しですから」

と多美子は、ちょっとはにかんだように答えた。

香田は車を出た。

多美子の部屋は2DKだった。香田は、きれいに整頓された洋間に案内された。ソファセットや洋酒棚が置いてある。

「ビールか、それとも水割りにしましょうか」

「いや、運転があるから」

「ここからならお宅まで二十分くらいでしょう？　大丈夫ですよ」

多美子は返事を待たずに、冷蔵庫からビールを取り出した。香田はアルコールに強い体質だった。ビールを二、三本のんでも、まったく変わらない。

多美子はチーズを切って出し、

「わたしも頂こうッと」

といった。

ビール一本のつもりが、一本では終らなくなった。いつの間にスイッチを入れたのか、ラテン音楽が流れている。

香田も知っている曲が流れてきた。ベッサメ・ムーチョだった。

多美子が、何かゴミが、といいながら、香田の肩に手をのばしてきた。多美子のつけている香水がかすかに香田の鼻孔を刺激した。香田はその手をかかえこんだ。多美子は、一瞬はっとしたようだったが、拒むことはしなかった。香田の腕の中に軀をあずけてきた。

香田は接吻し、多美子のセーターをふくよかに盛り上げている胸を愛撫した。

多美子は、声にならない呻きをもらし、軀をよじった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com